



## 特集 食と戦争・帝国主義

戦争・帝国主義と食の変容 宇田川 妙子  
冷戦期の中国都市部の食生活 劉征宇  
植民地期インドの禁酒運動 井坂 理穂  
ナチズムを台所から眺める 藤原 辰史





# 「供します男子」の登場まで

さいとう  
みなこ  
齋藤 美奈子

## 目次

- 1 エッセイ 千字文  
「供します男子」の登場まで  
齋藤 美奈子
- 
- 特集**  
**食と戦争・帝国主義**
- 2 戦争・帝国主義と食の変容  
宇田川 妙子
  - 4 冷戦期の中国都市部の食生活  
劉 征宇
  - 6 植民地期インドの禁酒運動  
井坂 理穂
  - 8 ナチズムを台所から眺める  
藤原 辰史
- 
- 10 みんぱく回遊  
タバコの利用あれこれ  
黒田 賢治
  - 12 みんぱくインフォメーション
  - 14 ○○してみました世界のフィールド  
仏領ギアナで  
「大きさの感覚の違い」を知る  
中川 理
  - 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
消えゆくオアシスのバスケットリー  
石山 俊
  - 18 シネ倶楽部 M  
「汚れなき祈り」に見る  
現代ルーマニア社会  
新免 光比呂
  - 20 ことばの迷い道  
あいさつは難しい  
市野 進一郎
  - 21 編集後記・次号の予告

表紙  
1920年代イタリアのトマト缶(5キログラム入り)  
© Musei del cibo  
(出典:Wikimedia Commons/ CC-BY-SA 3.0)

一九八〇年代の一時期、料理書の編集をしていたことがある。料理のレシピには紋切り型の表現があって、「供します」もそのひとつだった。最後の盛り付け方に出てくる表現で、「レモンのくし切りを添えて供します」「パセリのみじん切りをふって供します」のような形で使う。「供します」という以上、それは「人に食べさせるための料理」で、料理とはすなわち女性が、家族や恋人のために、作るものだったのだ。「わたし作る人ばく食べる人」というインスタントラーメンのCMを女性団体が告発したのは一九七五年。それから一〇年たっても、料理とジェンダーをめぐる状況に変化はなかったわけである。それが少し変わりはじめたのは九〇年代だ。

まず一九九〇年一二月に「男子厨房に入るべし」を旨とする雑誌『dancyu(ダンチュウ)』が創刊された。当時、私が苦笑したのは「dancyu」には「供します」の姿勢がまるでないことだった。自分が食べたい料理(主として酒肴)を自分のために作る。それがこの雑誌のレシピの姿勢で、「つたく男つてのはどこまで自己中心的なんだ」と思った覚えがある。

一九九七年にはテレビ番組「SMAP×SMAP」の一コーナーを書籍化した『ピストロスマップ完全レシピ』(発売は九六年一二月)がベストセラーになった。「ピストロSMAP」はゲストのオーダーに応え、二手に分かれたメンバーが腕を競うコーナーで、料理の目的は完全に「も

てなし」である。そのためか、やたらと凝った料理が多かった。男性が料理をする目新しさはあっても、「dancyu」も「ピストロSMAP」も、要は非日常性を楽しむイベント、あくまでも「趣味の料理」だったといえるだろう。

それから二十数年。現在、多くの料理レシピはネット上の「クックパッド」や「クラシル」で入手可能だ。レシピの表現も簡素化し、「供します」なんて言い回しも消えた。

最近の傾向をひとつあげるなら、ドラマなどで「料理をする男性」が好意的に描かれるケースが増えたことだろう。男性カッパルを描いたドラマ「きのう何食べた？」(二〇一九年)はその好例。家事能力の高い男性と仕事人間の女性の恋模様を描いた映画やドラマも少なくない。いうならば「供します男子」の登場である。料理自慢の男はいらない。家族や恋人のために日常的に台所に立つ男性が好ましい。「彼女の手料理が食べたい」なんてほざく男はじきに駆逐されるだろう。

## プロフィール

1956年、新潟市生まれ。文芸評論家。1994年『妊娠小説』(筑摩書房)でデビュー。2002年『文章読本さん江』(筑摩書房)で第1回小林秀雄賞受賞。他の著書に『名作うしろ読み』(中央公論新社)、『戦下のレシピ』(岩波書店)、『学校が教えないほんとうの政治の話』(筑摩書房)、『日本の同時代小説』(岩波書店)、『挑発する少女小説』(河出書房新社)など多数。



# 特集 食と戦争・帝国主義



1920年代イタリアのトマト缶(5キログラム入り) © Musei del cibo  
(出典: Wikimedia Commons/ CC-BY-SA 3.0)

食はわたしたちの生命・身体にとって必須であり、それゆえ権力、特に国家権力の影響を強く受ける。本特集では、帝国主義という、国家が他への侵略や支配をめざし、戦争にもつながっていく時代思潮に着目し、複雑な権力関係のなかで各地の食がどのように変化し、現在の食のあり方にどのようにつながっているのかを考えたい。

## 戦争・帝国主義と食の変容

うだ がわ た え こ  
宇田川 妙子

民博超域フィールド科学研究部

### 戦争・帝国主義と食との多様な関係

現在、わたしたちの食生活は豊かさを通り越して過剰ともいえる時代にある。ただし、この状況はそれほどむかしからのことではない。そしてその変化について語ろうとすると、食生活は戦後大きく変わったなどと、戦争にかかわることばをよく耳にする。

むしろそのことばも、たんに歴史的な時代区分を示しているだけのことは多い。しかし、例えば日本では、第二次世界大戦後、学校給食にパンとミルク(脱脂粉乳)が導入され、そのことが、後のわたしたちの食習慣や嗜好、そして食産業にも大きな影響を与えたことはよく知られている。これは、当時食糧難だった日本への支援という意味のみならず、日本がアメリカの余剰食物の市場として好都合だったことも大きかった。

戦争は、往々にして食糧難をもたらす。しかしその一方で、だからこそさまざまな工夫や技術革新がおこなわれ、各地の食の転換期にもなるなど、その関係はきわめて複雑である。特にその背景に帝国主義的な国家権力が存在する一九二〇世紀の戦争は、実際に人びとの食に多大な影響を与え、しばしば現在まで続くような変化をもたらしているのである。

続けて身近な例をあげてみよう。日本の「ナポリタン」が、第二次世界大戦後、横浜に進駐していたGHQから伝わったといわれているように、戦争を機にあらたな食がもたらされることは多い。ほかにも、英国をはじめとするヨーロッパで「地中海料理」という概念とレシピが普及したきっかけのひとつは、大戦中、通訳等として地中海諸国で働いていたエリザベス・デイビッドという英国人女性が戦後帰国して出版した『地中海食の本』というレシピ本だった。それは、当時まだ食糧難が続いていた英国社会に豊かな食のイメージをもたらすものとして大ベストセラーになり、他の国でも次々と翻訳された。戦争は、人の動きをさまざまなレベルで強制的か否かにかかわらず活発化させるが、それに伴って食も動いているのである。

また、食産業も戦争を機に発達したことはよく知られている。その代表的な例が缶詰であり、ナポレオンが遠征時の兵士の食糧問題を解決するために、運びやすい保存食の技術を公募したことに端を発する。このとき、密封して加熱殺菌するという原理による瓶詰が提案されたが、その後、よ

り軽く堅牢なブリキ缶になり改良を重ねられ、一般家庭にも浸透した。米国では、一八六〇年代の南北戦争の際に缶詰の需要が膨れ上がり、戦後の拡大した市場のターゲットが家庭に向けられ、缶詰産業の繁栄につながった。今でも缶詰で有名なハインツやキャンベルなどは、この時代に創設された食品会社である。

### 食から見る戦争の諸相、戦争から見る食の諸相

以上は、戦争と食との関係のごく一部である。ただし、その関係が、国家権力だけでなく民間企業、兵士や一般の人びとなど、さまざまなレベルで展開されていることは明らかだろう。それは強制的なものから、戦争を利用したものや偶然に起きたものもあり、その後定着したものばかりではなく、一時的だったものも多い。

そもそも戦争および帝国主義は、たんなる地図上の領土侵略や拡大ではなく、現実的な人の支配にかかわるものである。そして人は、食べなければ生きていくことはできず、よって戦争や帝国主義も必然的に食とかかわりをもつ。前述のように、戦時中はしばしば食糧難になるが、その理由のひとつは戦略として食料補給が絶たれるためである。一方国内では、配給制度が導入されるほか、食糧増産のため、品種改良等にかかわる学問・技術が発達することもある。さらには節約や代替食のキャンペーン等がおこなわれ、学問、女性、家庭など、多種多様な立場の人びとを巻き込み、ナショナルリズムなどのイデオロギーとも結びつく。また、開



20世紀はじめのトマト缶製造機  
(イタリア、パルマ、トマト博物館、2017年)



昭和30年代の学校給食の食事風景  
(提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター)



昭和30年~40年代の学校給食の食事風景  
(提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター)



脱脂粉乳荷揚げ  
(提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター)



昭和30年の学校給食のレプリカ献立。コッペパン、ミルク(脱脂粉乳)、アジフライ、サラダ、ジャム。パンや乳製品を食べる食習慣が日本に定着する一因となった(提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター)



昭和20年の学校給食のレプリカ献立。ミルク(脱脂粉乳)、みそ汁。戦後すぐに脱脂粉乳が導入された(提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター)



# 冷戦期の中国都市部の食生活

劉征宇

民博外来研究員

中華人民共和国の成立の翌年、一九五〇年、朝鮮戦争が勃発した。毛沢東をはじめとする共産党指導部は、アメリカの軍事介入を帝国主義的侵略とみなし、「抗美援朝（こうびえん援朝）」運動を全国に展開し、中国人民志願軍を派遣して朝鮮戦争に参戦した。その結果、中国は西側諸国の封じ込めを受けて、アメリカからの攻撃に備える準戦時状態を長期間続けていった。では、このような状態下の人びとは、日々の食生活をどのように送ってきたのだろうか？ここでは、毛沢東時代（一九四九～七六年）の都市部を事例で紹介したい。

## 農産物の国家統制と都市部の食料調達

アメリカとの対抗のなかで、共産党政府はソ連モデルの社会主義体制を導入し、国家の計画に則って農産物の生産・流通・分配を管理しはじめた。具体的には、農村地域において農産物を定価かつ定量で強制的に買い上げると同時に、都市部において食料の販売量を制限した。このような農産物の管理は、当時の人びとの食生活に大きな制限を加えた。

なかでも都市部では、穀物や野菜、肉類、卵、水産物、調味料を含むほぼすべての食料は有償の配給制となり、国営店舗をおして公定価格で販

売された。それと同時に、政府は食料販売の種類と数量を管理するため、都市住民に購入証や配給券を発行した。購入証とは、世帯ごとに配られる通帳形式の証明書である。その裏面には、世帯の住所や人数構成、購入できる食料の種類と数量など、必要な情報がすべて明記されていた。一方、配給券は、紙幣のような形の印刷物で一枚につき一度のみ使用できるものであり、食料の種類や購入できる数量、利用可能な地域、有効期間が記されていた。都市住民は、これらの購入証や配給券を提示しないと、食料を購入できなかったのだ。

## 配給制下の都市住民の食生活

配給制下の都市住民は指定の国営店舗において、現金や購入証・配給券を持参し、指定の割当量で食料を購入した。その場合、彼らは基本的に店舗に入荷されるものしか入手できず、自分が欲しいものをあまり買えなかった。この制約によって、当時の人びとの家庭の食卓はより均質化され、おもに穀物と旬の野菜の料理で構成されるようになった。

一方、実際に都市住民が食生活を送る際に、店舗からの購入以外に、人間関係の活用や保存食の手作りなどの多様な工夫も加えて、自分や家族のニーズに応じた食料を入手した。例えば、人びとは、

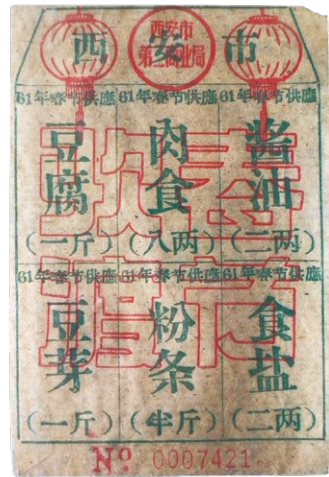
農村地域の親族から豚肉、魚あるいは卵をもらったり、隣人または同僚と配給券を密かに交換したりして、家族・友人間の助け合いを頻繁におこなっていた。また、冬の野菜供給の不足を補うため、秋にハクサイやダイコン、カラシナ、トマトを買いだめして、乾燥や塩漬け、発酵などの既存の加工方法を活かして保存食を手作りすることもあった。これらの手段をおして、都市住民は日常の食料を確保し、各々の食生活を維持したのである。

## 赤い年代の記憶と食のノスタルジア

一九七〇年代末期から、共産党政府は、アメリカ



1970年代の雰囲気が残る食料販売店（北京市、2016年）



配給券（西安市発行、1961年旧正月）

との関係を改善し、準戦時状態を解除していった。それにとまねい、市場経済のメカニズムも導入され、農産物の国家統制が緩和されていった。特に、配給制が廃止され、都市住民は購入証や配給券を使わずとも食料を自由に購入できるようになった。

ただし、現在の都市部では、毛沢東時代の影響が強く残っている。人びとの日常生活では、野菜を買いだめして保存食を手作りする習慣、あるいは親戚や知り合いをおして、自分の欲しいものを入手することが依然として続けられている。また、共産党の革命や戦争の時期に創り出された「紅色文化（レッドカルチャー）」は、近年、政治的求心力を高めるため、政府によって「先進的な文化」としてアピールされ、全国的な広がりを見せてきた。それにより、紅色文化をテーマとする観光施設や料理店が全国に相次いでオープンした。そこには、過去の集団生活を懐かしむ年配の人だけでなく、「赤い」年代の雰囲気を経験したい若者も多く集まっている。このように、かつての準戦時状態は解除されたが、その時代に定着した消費の観念は、中国人の現在の日常生活にも影響を与え続けている。



毛沢東時代のポスターやスローガン、食器を活用する料理店（長春市、2017年）



毛沢東時代のスローガンやイラストがデザインされている料理店のメニューや食器（天津市、2015年）



朝鮮戦争期のプロパガンダ用ポスター「抗美援朝志願軍を全力で支援する」（中国、H0254355）



穀物購入証。「戦争に備え、飢饉に備え、人民のため」という毛沢東語録が載せられている（天津市発行、1970年代）



# 植民地期インドの禁酒運動

井坂 理穂

東京大学教授

## インド憲法と禁酒州

最近では日本でもインド産ビール、ワインなどがネット販売されていて、インド人はあまりお酒を飲まないというイメージは昔前ほど語られなくなった。都市部では若者がおしゃれなバーに集う姿も見られ、経済自由化・グローバル化を象徴するかに見える。しかしそうしたなか、筆者の調査地であるグジャラート州は、一九六〇年に州が成立して以降、今日まで禁酒政策を継続している（とはいえ、法規制が有効に機能しているとはいえないのだが）。

インドではグジャラート州のほかにも、全面的・部分的な禁酒政策をかつて試みたり、現在実行中である州が複数存在する。その背景にあるのが、インド憲法第四編「国家政策の指導原則」に含まれる第四七条である。そこでは、国は「国民の栄養水準・生活水準の向上、公衆衛生の改善をその主要な義務とみなさなければならない」とされ、医療目的の場合を除き、「健康に害のある酒類・麻薬物の消費禁止に努めなければならない」として見せた禁酒運動の延長線上に制定され、制憲議会で同条項が議論されたときには、「独立の父」モー

イギリスやアメリカの宣教師、禁酒運動家たちも、インドの禁酒運動に積極的に関与した。彼らは在地の協力者と連携しつつ、飲酒が社会的下層の人びとの生活に及ぼす弊害を指摘し、酒税からの利益を優先するかに見える植民地政府の対応を批判した。インドの禁酒運動には、このように西洋における禁酒の思想・運動も影響を与えていた。

## ナショナリズムと禁酒運動

こうした流れのなかで、インドのナショナリストたちのあいだでは、飲酒の習慣をインドの伝統に反するもの、植民地支配の産物として非難する声が強まり、禁酒運動は次第に政治化していった。その方向をさらに後押ししたのがガンディーである。

一九二〇年代以降、禁酒運動はガンディー指導下の独立運動のなかに組み込まれていく。彼は、もし自分が一時間ほど全インドの独裁者になったなら、まず最初にすべての酒店を賠償なしに閉鎖するだろうとまで述べている。個々人が自らの欲望を統御すべきことを説くガンディーにとって、飲酒行為は到底認めえぬものであった。彼の見解では、インドで飲酒の習慣をもつ者は少数にすぎず、世界中で飲酒の習慣を有するものが容易な地域はないはずであった。彼の指導下で展開された非暴力・不服従運動では、酒店を取り囲んで人びとに酒の購入をやめさせる運動が広く組織され、女性も多数参加した。

この禁酒運動の流れは、インド憲法制定過程や独立後の各州でのアルコール政策へと引き継がれ

ハンダース・カラムチャンド・ガンディー（通称マハートマー・ガンディー）が禁酒運動にいかん尽力したかが繰り返し言及された。インドの植民地支配、独立運動と禁酒運動のあいだには、一体どのような関連があるのだろうか？

## 植民地支配と酒税制度

まず、インドでは古代から多様な酒がつけられ、消費されてきたことを強調しておきたい。確かにバラモンなど上位カーストのあいだでは、飲酒を忌避すべきものとする見方が存在したが、そうした社会層はごく限られていた。教義上では酒の摂取が禁じられているムスリムのあいだでも、飲酒行為は広範におこなわれていた。お酒を飲まないインド人、というイメージは、近代になってからつくられた「伝統」であるとの指摘もある。

一九世紀後半、イギリスに

ていく。しかし、州財政に占める酒税の重要性や取り締まりの難しさから、禁酒政策は容易には広まらなかった。今日まで禁酒政策をとり続けているグジャラート州はガンディーの出身地だが、ここでも近年、プライバシー権や平等権の観点から、禁酒法を違憲とする訴えが次々と高等裁判所に出されている。植民地期から続く飲酒・禁酒をめぐる議論は、今後も続きそうである。

付記

現代インドの飲酒事情については、池亀彰「飲むべきか飲まぬべきか——ベンガール市でのフィールドワークから」（井坂理穂・山根聡編『食から描くインド——近現代の社会変容とアイデンティティ』春風社、二〇一九年）を参照されたい。



若者たちの集うバー（ニューデリー、2016年）



ヤシの樹液を発酵させたトディーはインド亜大陸で広く飲まれてきた（撮影：栗屋利江、ケーララ州、2016年）



町の酒店（撮影：小松久恵、ジャイプル、2017年）



アメリカの禁酒運動家ウィリアム・E・“フッシーフット”・ジョンソンのインド訪問（1921年）（出典：Tarini Prasad Sinha, "Pussyfoot" Johnson and His Campaign in Hindustan, Madras: Ganesh, 1922.）



# ナチズムを台所から眺める

ふじはら たつし  
藤原 辰史

京都大学人文科学研究所准教授

## システムキッチンの聖地

世界台所史という本がもし書かれるとすれば、二〇世紀の章はドイツのフランクフルトに捧げられるだろう。第一次世界大戦後の住宅難ゆえに広大な団地が造成された都市であり、発電所を運営して、積極的に電気のネットワークを形成した代表的な都市でもある。

その都市で、オーストリア初の女性建築家で、共産主義者だったマルガレテ・シュツテリホツキーが、フランクフルト・キッチンという大量生産型のシステムキッチンを設計した。集合住宅の狭い部屋の狭い台所であつても、おしゃれに、機能的に、衛生的に料理ができるキッチンには、その後、世界中に普及していく。拙著「ナチスのキッチン——「食べること」の環境史 決定版」(共和国、二〇一六年)で、わたしはシュツテリホツキーのフランクフルト・キッチンの歴史を調べたが、その過程で気づいたのは、工場のような機能性をもつキッチンの魅力であつた。



フランクフルト・キッチンの外観。作業台、シンク、小麦や砂糖などを入れる棚などが見える(出典:Noever, Die Frankfurter Küche von Margarete Schütte-Lihotzky, 1992, S. 15.)



復元されたフランクフルト・キッチン(カールスルーエ州立博物館、2013年)

## スタイリッシュなキッチン

南西ドイツの中心都市カールスルーエの州立博物館の特別展で、再現されたフランクフルト・キッチンを見学したことがある。無駄を排した棚、座つて調理できる調理台、水が切りやすい皿置き、煤や煙が出ない電気またはガスのコンロ、青で統一されたスタイリッシュな外観。「料理してみたい」と思わせるおしゃれな空間づくりには、シュツテリホツキーのある願いが伝わらぬかっていた。それは、女性たちが単調な家事から解放され、充実した人生を生きてほしい、そして、二度と第一次

のお気に入りだった。

だが、個人的な好みは別として、ヒトラーがポーランドに侵攻して以来、キッチンは居心地よりも効率化が優先されていく。短時間で栄養のある食品をを料理し、フードロスをなくすることが最重要課題となる。主婦たちは生ゴミの分別をしつかりとしなければ、民族の敵だ、通報するぞと脅された。生ゴミを豚のエサとして利用する政策を実施していたからだ。できるだけ国産の食材を使うようにも指導された。バナナではなくてリンゴ、紅茶でなくてハーブティー。家政学の雑誌には、いかに料理中に無駄な動きをなくすかという研究論文が並ぶ。空襲で家が破壊されると、狭い簡易

世界大戦時のように子どもたちが飢えないような世界になってほしい、というものであった。

拙著刊行後に、北ドイツの都市ツェレで、一九二〇年代当時のフランクフルト・キッチンのプロモーション映像を観た。そこには、おしゃれな服を着たまま椅子に座って野菜を切るモダンガールの姿が映し出されていた。

## ナチスのキッチン

一九三三年一月三〇日にヒトラーが政権を掌握すると、モダニズムの洗礼を受けた女性たちはどうなったのだろうか。彼女たちには少なくとも変化が訪れた。まず、ナチスは、女性は生殖と家事

住宅のキッチンが設計された。それは居間に併設されていたながら、必要最低限のものしかない大量生産されたキッチンだった。

ナチスはキッチンを民族の象徴としながら、合理化を否定せず、キッチンを通じて女性の男性や政治への従属を推進した。フランクフルト・キッチンに心弾ませた女性たちもまた、台所の戦場化に巻き込まれていく。ドイツの子どもたちはほとんど飢えなかった。とはいえ、それは占領地の、社会的な弱者である子どもたちや女性たちを飢えさせることでようやく実現した砂上の楼閣であつた。シュツテリホツキーの夢は、結局果たされなかったのである。



...und das ist  
mein Geheimnis:



ナチスが推奨した節約料理であるアイントップ料理に自社製のピオンを使うように宣伝するマギーの広告(出典:Erna Horn, Der Eintopf des deutschen Spargericht, Erna Horn Verlag, Frasdorf-München, 1933.)



Abb. 5. Schneiden einer Scheibe Brot aus freier Hand



Abb. 6. Schneiden einer Scheibe Brot auf dem Tisch

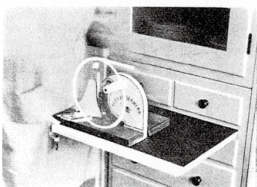


Abb. 7. Schneiden einer Scheibe Brot mit der Maschine



ゲルトルト・ショルツ＝クリンク  
(出典:Wikimedia Commons/ Bundesarchiv, Bild 146II-104/ CC-BY-SA 3.0)

戦争中のナチス・ドイツの家政学雑誌の記事。パンひと切れ分を切る手の動きを光の軌跡であらわし、台所での効率的な作業の分析がされている。上から、左手に持つパンを切る動き、テーブル上でパンを切る動き、スライサーを使用したときの動き(出典:Georg Villwock, Physiologische Rationalisierung der Hausarbeit, in: Hauswirtschaftliche Jahrbücher, Heft 1, 1942, S. 85.)



日本の酒場にそれぞれの雰囲気や暗黙のルールがあるように、筆者が調査する酒場のないイラン・イスラム共和国でも、ガフヴェハーネとよばれる飲食店に、店ごとの「流儀・作法」がある。ガフヴェハーネでは、瓶に貯めた水をおして煙を吸う水タバコとともに、紅茶や軽食が出される。ある店では絨毯が敷かれた高床式の小上がり席に靴を脱いで上がり、背面のクッションにもたれかけ、水タバコを吸いながら、客同士が卑猥な内輪話も含め屈託なく大きな声で話し合う。また別の店では、目の前のテーブルに供された水タバコを黙々と吸いながら、紅茶をすすり、一緒に来た知人とひっそりと語り合う。だが、どの店も、基本的に客が成人男性に限られるという点に加え、近年では二〇〇七年一月に施行された「禁煙法」によって、店内での紙巻タバコ（以下、たばこと表記）の喫煙が禁止されている。水タバコの店でたばこが禁止さ



ガフヴェハーネで提供される水タバコ  
(イラン、テヘラン、2016年)

アメリカ大陸では、煙を吸う他に、嚙んで口腔から吸収したり、細かくして鼻から吸引したりしている。このように、タバコは煙の吸引だけでなく、嚙んだり嗅いだりと多様な方法で用いられている。嚙む方法については展示の解説プレートに限られたが、嗅ぐ方法については、中央・北アジア展示のモンゴルの嗅ぎタバコ入れや、アメリカ展示の嗅ぎタバコの道具といった資料があった。とはいえ、これらの道具を用いたタバコの利用は、今日では少数派にとどまる。今日、タバコの利用の中心を占めるのは無論、たばこの喫煙である。

### 消えゆくたばこ

一九世紀半ばにあらわれた刻んだ葉タバコを紙で巻いたたばこは、一九世紀後半まで贅沢品であり、地域によっては街頭で販売員が一本ずつ手で巻いて作っていた。例えばイランでは二〇世紀初頭の都市部で客寄せのために「十代の美少年」もこれをおこなっていたという記録がある。一九世紀末になると、西洋でたばこの自動巻上機が発明され、機械化によって廉価な製品が大量に生産できるようになった。人口の増加もあり、二〇世紀を通じて世界のたばこの消費は増え、一般的なタバコの利用方法となっていた。

しかし展示場をめぐる、大量生産品であるためか、たばこの関連資料は思った以

## みんぱく回遊

## タバコの利用

## あれこれ

黒田賢治  
民博グローバル現象研究部



E シガレットケース  
(モンゴル、H0277348)

中国地域の文化展示  
「装い」

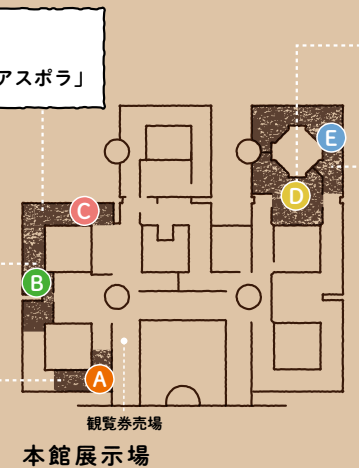
中央・北アジア展示  
「社会主義の時代」  
「モンゴル」

E 嗅ぎタバコ入れと、それを入れるための袋  
(モンゴル、H0203428)

西アジア展示  
「パレスチナ・ディアスポラ」

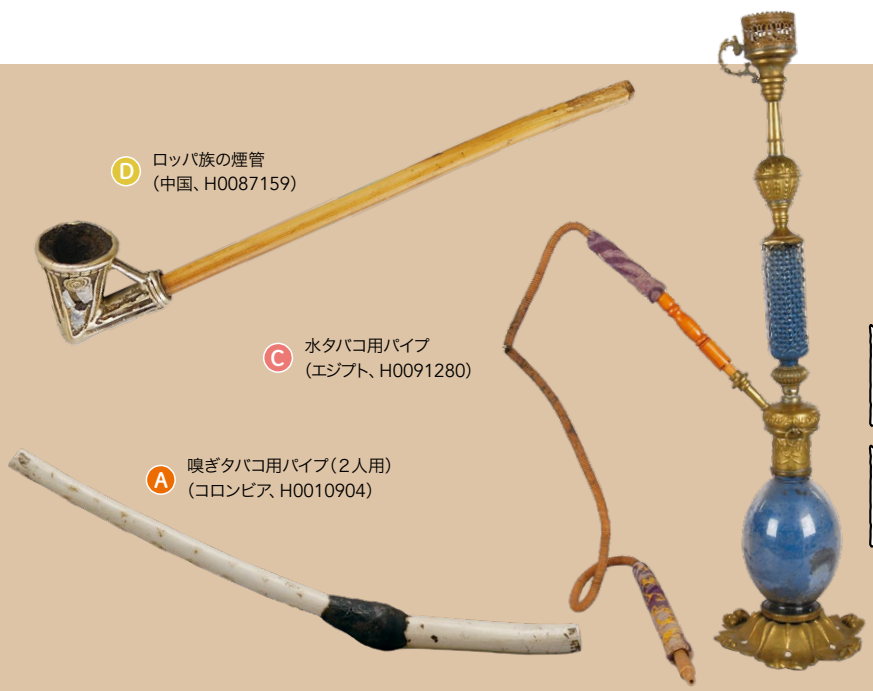
アフリカ展示  
「都市に集う」

アメリカ展示  
「食べる」



観覧券売場  
本館展示場

Hからはじまる番号は標本番号です。



D ロッパ族の煙管  
(中国、H0087159)

C 水タバコ用パイプ  
(エジプト、H0091280)

A 嗅ぎタバコ用パイプ(2人用)  
(コロンビア、H0010904)

B キオスク(ガーナ、H0205092)  
台のわきにはマッチなどとともにたばこが並べられている



れるというのは可笑しいが、イランでも、たばこの喫煙による健康面への影響が危惧されているのだ。

### 旅するタバコ

南米原産のナス科の植物であるタバコは大航海時代に、乾燥させた葉だけでなく、栽培用に苗などの状態でも世界各地にもたらされ、以後それぞれの土地に根差した利用がおこなわれてきた。そのため、みんぱくの展示場を歩けば、さまざまな地域の展示でタバコに関連した資料に出くわす。オセアニア、ヨーロッパの展示場にはなかったが、標本資料目録データベースで検索すると、それらの地域のタバコ関連資料も収蔵されていた。

多くの地域の展示で見られるのは、椀型の先端部分の火皿に刻んだ乾燥葉タバコなどをのせ、火をつけて煙を吸う煙管や、煙管や乾燥葉タバコを携帯するためのタバコ入れである。

中国地域の文化展示では、一見わかりづらいが、ロッパ族の男性用盛装をしたマネキンの右手に煙管が握られていた。また西アジア展示では、エジプトの水タバコに出くわした。これらの資料に示されるように、タバコといえばその煙を吸う利用法がまず思い浮かぶ。しかしながら、タバコの「故郷」である

上に少なかった。それでも、中央・北アジア展示にあるモンゴルのシガレットケースのほか、アフリカ展示のキオスク(小型売店)に商品のひとつとして置かれているのを見つけることができた。またビデオテーカの「ケープタウンの『スラム』の一日」(番組番号1629)では、スラムの家庭でたばこをバラ売りする様子も見られた。例外はあるものの、健康面への危惧と禁煙政策が実施された結果、各国の喫煙率は下降し続けており、世界のたばこの消費も二〇〇九年にピークを迎えたのち、減少傾向にある。たばこは、この世界から消えつつあるともいえるのだ。

展示場を回遊しながら、いずれは展示場やビデオテーカのたばこが貴重な史料として観覧者の目に触れられるのだろうかと思ひ浮かべた。



重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんなくホームページ  
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



特別展

日本・モンゴル外交関係樹立50周年  
記念特別展

「邂逅する写真たち」  
モンゴルの100年前と今

モンゴルの100年の変貌を写真で辿る体験型の「写真展」です。大草原と遊牧民とは異なるモンゴルに出逢えます。

会期 5月31日(火)まで  
会場 特別展示館



一生懸命に勉強する子どもたち (撮影：B. インジャーシ、2017年) ©Injinaash, Bor

みんなく無料シャトルバスの  
ご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくとの間の直通送迎バスを特別展の会期中に運行します。詳しくはみんなくホームページをご覧ください。

企画展

「焼畑——佐々木高明の見た五木村そして世界へ」

日本や世界の焼畑を事例にして、現代社会と焼畑とのかわり、日本文化のなかでの焼畑のもつ意義について紹介します。

会期 6月7日(火)まで  
会場 本館企画展示場

研究公演

「伝承する人びと」

北インド古典音楽家4名の器楽演奏をとおして、師弟制度や師匠から継承した伝統を日本の地で繋ぐ、現代の北インド音楽の伝承について考えます。

みんなくゼミナール

参加形式

- ①会場参加 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
- ・要事前申込、先着順、参加無料
- ・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第521回

5月21日(土)13時30分～15時(13時開場)

ドキュメンタリー写真家  
B.インジャーシが見た現代モンゴル

講師 B.インジャーシ(写真家)  
港千尋(写真家、多摩美術大学 教授)  
川瀬慈(本館 准教授)  
島村一平(本館 准教授)

【申込期間】

- 一般受付  
5月18日(水)まで  
※友の会電話先行受付は終了しました。

理解すればよいのか、フランスに住むモン  
難民の事例から考えます。

【申込期間】

- 友の会電話先行予約  
5月16日(月)～20日(金)  
定員30名、会場参加対象
- 【申込先】  
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
- 一般受付  
5月23日(月)～6月15日(水)

※会場参加のみの開催です。オンライン(ラ  
イブ配信)はございません。



南フランスの畑で働くモン難民 (2015年)

みんなくウィークエンド・  
サロン——研究者と話そう

会場 第5セミナー室(定員42名)  
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展  
示観覧券)、14時より整理券配布

※各回、開始30分前に開場

本館の研究者が「みんなくの展示資料」「調  
査している地域(国)の最新情報」「現在取り  
組んでいる研究」についてわかりやすくお話  
しします。

5月8日(日)14時30分～15時

マヤの焼畑——儀礼と世界観

話者 鈴木紀(本館 教授)

5月29日(日)14時30分～15時

メディア化されたイスラームと  
知識人

話者 相島葉月(本館 准教授)

刊行物紹介

■島村一平著  
『憑依と抵抗——現代モンゴルにおけ  
る宗教とナショナリズム』  
晶文社 2,420円(税込)

本書は「憑依」と「抵抗」をキーワードに  
現代モンゴルにおける宗教とナショナリ  
ズムの諸相に迫った  
論考である。扱う  
テーマは、化身ラ  
マ、シャーマニズ  
ム、ヒップホップ、  
民族衣装、そしてチ  
ンギス・ハーン。



日時 6月11日(土)13時30分  
15時50分(13時開場)

解説 岡田恵美(本館 准教授)

参加形式

- ①会場参加 みんなくインテリジェン  
トホール(講堂)(定員130名)
- ※要事前申込(代表者を含む2名ま  
で)、先着順、参加無料(要展示観  
覧券)

※事前予約の方へ入場整理券を当日  
11時から本館2階会場入口にて配  
布します。

※定員に満たない場合のみ当日参加  
を受け付けます。

- ②オンライン(ライブ配信)
- ※申込不要、当日みんなくホームペ  
ージより視聴可能。

【申込期間】

- 友の会電話先行予約  
5月6日(金)まで  
定員30名
- 【申込先】  
国立民族学博物館友の会  
(千里文化財団)
- 一般受付  
5月9日(月)～6月3日(金)

その他のイベント

「音楽の祭日2022  
in みんなく」

1982年にフランスで、夏至の日に  
みんなで音楽を楽しむ「音楽の祭日」  
がはじまりました。みんなくでも、世  
界のさまざまな楽器を使って「音楽の  
祭日」を祝います。

日時 6月26日(日)  
10時30分～16時30分(予定)  
会場 みんなくインテリジェントホ  
ール(講堂)

※オンライン(ライブ配信)あり  
※要事前申込、参加無料(展示を  
ご覧になる方は、展示観覧券が必要で  
す)

お問い合わせ先

企画課「音楽の祭日」担当  
電話 06-6878-8221  
(土日祝を除く10時～16時)

巡回展

「驚異と怪異  
——世界の幻獣と靈獣たち」

会期 6月26日(日)まで

会場 高知県立歴史民俗資料館  
高知県立歴史民俗資料館(公  
益財団法人高知県文化財団)  
国立民族学博物館友の会  
公益財団法人千里文化財団  
KUTVテレビ高知

第11回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」  
受賞

人類学的冒険の魅力をよく伝えてい  
るなどとして、著作「エチオピア高原  
の吟遊詩人——うたに生きる者たち」  
を対象に本館の川瀬慈准教授が第11  
回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受  
賞しました。

お知らせ

ご協力いただいておりますオンライン  
予約システムによる来館予約及び入  
館の際の本館1階エントランスでの来  
館者連絡先記入票の記載が不要にな  
りました。

研究部新メンバー  
岸上伸啓 副館長 教授  
(学術資源研究開発センター)



総合研究大学院  
大学で博士号を取  
得。1996年よ  
り民博、2018  
年から人間文化研  
究機構本部に出  
向。専門は文  
学。

友の会

友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあり  
ます。

- ※会員：無料  
一般：500円(会場参加のみ)
- ※要事前申込、先着順

第524回 5月7日(土)13時30分～15時

企画展「焼畑——佐々木高明の見た五木村、  
そして世界へ」関連

佐々木高明を語る  
——研究とその人物像

講師 ヨーゼフ・クライナー(ボン大学 名誉  
教授)  
宇野文男(元福井大学 教授)  
池谷和信(本館 教授)

参加形式

本館第5セミナー室(定員40名)

国立民族学博物館第2代館長を務めた佐々  
木高明は、焼畑研究の第一人者、照葉樹  
林文化論の提唱者のひとりとして知られて  
います。生前の佐々木とゆかりの深い話者3名  
による対談をとおして、研究者という側面と  
とどまらない佐々木高明の素顔に迫ります。

受付フォーム

<https://www.senri-f.or.jp/524tomo/>  
※会場参加のみの開催です。オンライン(ラ  
イブ配信)はございません。

第525回 6月4日(土)13時30分～15時

コサックの国で生まれた  
ユダヤ人の大統領？

——ウクライナとロシアにおける  
民族問題の諸相

講師 赤尾光春(大阪大学 非常勤講師)

参加形式

- ①本館第5セミナー室(定員40名)
- ②オンライン(ライブ配信)

2014年の「ユーロ・マイダン革命」とともに民  
族主義が台頭したウクライナでは今、ユダ  
ヤ系の大統領がロシアとの戦いで指揮を  
執っています。この驚くべき状況はどのよう  
にして生まれ、どのような影響をもたらすの  
でしょうか。ウクライナとロシア、そしてユダ  
ヤ人との歴史的な関係を紐解き、複雑な民  
族問題の諸相を読み解きます。

受付フォーム

<https://www.senri-f.or.jp/525tomo/>

人類学。北米極北地域のイヌイット  
やイヌイットの捕鯨や食物分配、北  
西海岸先住民の社会変化などを研究。  
松本雄一 准教授  
(人類文明誌研究部)



イェール大学大  
学院で博士号取  
得。ダンパート  
ンオークス研究  
所フェロ、民博  
機関研究員、山  
形大学人文社会科学研究部を経て現職。  
専門はアンテラス考古学で、文明の形成  
過程における祭祀建築の役割などを  
研究。

黒田賢治 助教  
(グローバル現象研究部)



京都大学大学院  
で博士号を取得  
後、人間文化研  
究機構基幹研究  
プロジェクト現  
代中東地域研究  
国立民族学博物館拠点特任助教など  
を経て現職。フィールドワークに基づ  
て現代イランの政治研究に従事する  
他、近現代の日本—中東関係史の研  
究に携わる。

宮前知佐子 助教  
(人類基礎理論研究部)



東京工業大学大  
学院で博士号取  
得。凸版印刷株  
式会社ロンドン  
サイエンスコミュニ  
シヤム(インター  
ンシップ)、東京工業大学博物館を  
経て現職。科学的手法・技術を用いた  
文化資源のドキュメンテーションと  
アーカイブデータの活用、デジタル  
技術を導入した博物館展示に関する  
研究に取り組む。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)  
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/) E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp





# 仏領ギアナで

# 「大きさの感覚の違い」を知る

なかがわ おさむ  
中川理  
民博グローバル現象研究部



## ジャングルのなかの集落

コロナ禍が始まる前、短い期間ではあるが南米の仏領ギアナに行く機会があった。このフランスの海外県に住んでいるモンの人びとを訪ねるためだ。モンは、もともと中国南西部や東南アジア



泊めもらった家の窓から。この車が後で故障することに……

ア諸国（ベトナム、ラオス、タイ）の山間部に住んでいた少数民族である。ラオス内戦に巻き込まれて、一九七〇年代後半に多くのモンが難民となった。その大半はアメリカ合衆国やフランス本土に移り住んだが、仏領ギアナに受け入れられた人たちもいる。彼らは政府か

ら与えられたジャングルを切り拓いて、一から集落と農地を作り上げた。今では、モンは仏領ギアナの主要な農業生産者となっている。加えて、いったんフランス本土に定住した蒙のなかにも、あらたに仏領ギアナに再移住する人たちもいる。もともと南フランスで農業を営むモンについて調査をしていたわたしは、本土から移住していった人たちの足跡を追いかけて、それまでどんな場所か想像したこともなかった仏領ギアナに恐る恐る足を踏み入れた。

仏領ギアナのモンは、いくつかの集落にわかれて住んでいる。一九七〇年代の終わりに最初に到着したモンは、ふたつの集落を築いた。県庁所在地カイエンヌの南にあるカカオと、西にあるジャヴェである。両者は、今では学校や教会といった施設を備えた立派な集



ジャングルを車で走ってみました

開拓地の写真を撮る筆者  
(写真はいずれも2018年に撮影)

## エンジンよ止まらなさい

そうやって訪れたひとつの集落での話だ。わたしは二日間この集落に滞在して、住民からその成り立ちについて話を聞くことができた。この集落は、リヨンやリモージュなどフランスの都会からやってきたモンが、一九九二年に切り拓いた。行政は道を一本引いてくれただけで、ジャングルを切り拓く作業はすべて入植者自身がおこなったという。その作業は過酷で、最初に入植した二〇ほどの家族のうち残ったのはわずか三家族だけだったそうだ。その後、親類のつてなどを頼って新しく入植するモンが徐々に加わり、現在では三〇家族程度にまで増えている。そのなかには、わたしが調査地とする南フランスから来た家族もいた。わたしは、このような選択をする彼らの勇気に驚かされた。

聞き取りの成果に満足して、わたしは次の目的地へ向かおうと車に乗り込んだ。ところが、エンジンがうんともすんともいわない。知人から借りた日本車は新しいとはいえない難かったが、それまでは順調に走ってくれていたのに。聞き取りをした住民の一人が助けてくれて、本土で自動車修理工だったという別の住民を呼んでいろいろと試し、けっきょく押しがけでエンジンをかけるのに成功した。しかし、また止まったら二度と

動かないかもしれない。わたしは気が進まなかったが、二人の勧めにしたがってエンジンを切らないように気を付けてカイエンヌに戻ることにした。このときほど、運転で緊張したことはない。集落を出ると、約一〇〇キロメートルに渡って周りはジャングルだけで、人の気配

はまったくない。もし止まってしまったら……。延々と続く緑に押しつぶされるような気持ちになりながら、なんとか無事にカイエンヌまでたどり着いた。この経験をとおして、仏領ギアナと本土の大きさの感覚の違いを、わたしは身をもって知ることになった。この地では、まるでジャングルの海のなかの小島のように、人が住む場所と場所のあいだの距離は遠く離れている。では、この環境のなかで生きるとはどういう経験なのだろうか。コロナ禍が収まって再び現地を訪れることができるようになったら、より深く聞いてみたい。



上:1992年に拓かれた集落の遠景。周囲に農地が広がる  
下:カイエンヌの中央市場の風景。売り手の多くはモンである



# 消えゆくオアシスのバスケットリー

いしやま しゅん  
石山 俊  
民博 プロジェクト研究員

乾燥した砂漠地帯で、人びとはどのように植物を育て、利用しているのだろうか。そして植物を素材としてどのようなバスケットリーを作っているのだろうか。本号ではアフリカ北部のサハラ砂漠におけるバスケットリーを追ってみたい。



ヒシイラ

カスカス

シャルカ



上: ナツメヤシの枝打ち作業 (アルジェリア、エル・ウェド県、2019年)  
下: オアシスの小道に置かれた水容器。現代ではポリタンクが使われ、グニナもアルミ製のカップになった (アルジェリア、アドラール県、2010年)

スを蒸すための蒸籠である。カスカスの底には穴が空いている。素焼きの壺に入れられたクスクス用ソースを温める際、壺の上にカスカスを置き、同時にクスクスを蒸すことができる。

また、オアシスの農園で使用された水を汲むための容器にグニナがある。かつて、オアシスの農園地帯では、農園のあいだをとる小道のところでどこに水を入れた素焼きの甕が置かれていた。サハラ・オアシスでは六月から八月にかけての酷暑期には、日陰でも摂氏四五度に達する。この水甕は道行く人びとが自由に喉を潤すためのものである。甕から水をすくうためのグニナもナツメヤシの葉を編んだものだ。しかし、葉を編んだだけでは、隙間から水が漏れてしまう。そのため、グニナにはビヤクシン属の植物の樹液を抽出した植物性タールが塗られている。その香りは、日本でおなじみの整腸薬に近い。しか



グニナ

これらのバスケットリーは、すでに過去のものとなってしまった。手間をかけてバスケットリーを作るよりも、安価な輸入品を購入した方が楽だからである。ヒシイラはアルミ製の盆に、カスカスはアルミ製の蒸籠に取って代わられた。ナツメヤシの葉を編んだうえにタールを塗るという手間がかかるグニナも、安価な輸入品のプラスチック製やアルミ製のカップになった。一九九〇年代以降の野生動物保護政策の推進にもなつて、狩猟もおこなわれなくなり、シャルカも姿を消した。オアシスの知恵が詰まったバスケットリーは、観光物産展や土産物屋においてのみその存在感をささやかに主張している。

さらに、幹は建材として重宝され、枝打ちで落とされた古葉はバスケットリー作りに用いられてきた。その製作は、農作業や家事の合間にも女性によつておこなわれていた。

ナツメヤシの葉で編まれたバスケットリーのなかでも、カゴや小物入れは自家用、土産物用として目にする機会がある。しかし、ここでは今では稀となつてしまったバスケットリーを紹介してみたい。

アフリカ大陸北部に東西五〇〇〇キロメートル、南北一七〇〇キロメートルにわたって広がる世界最大の砂漠であるサハラには、多数のオアシスが点在する。オアシスとは砂漠において人間が利用できる水がある場所である。ここでは乾燥と高温という特徴的な自然環境のなかで、人びとの生活が営まれてきた。降雨量が極端に少ない砂漠のオアシスで、農業が可能となる理由は灌漑にある。灌漑農業に欠かすことができない植物がナツメヤシだ。ナツメヤシは高温・乾燥に強い植物であるゆえ、熱帯・亜熱帯の砂漠に点在するオアシスで古くから栽培されてきた。

ナツメヤシのおもな利用法は、その実であるデーツを食べることにあるが、ナツメヤシの木陰が作りだす地表の温度低下・湿度保持機能は、高温・乾燥下で営まれるオアシスの灌漑農業に不可欠な作物栽培環境を提供してきた。列状に植えられたナツメヤシの下では、オオムギ、コムギ、野菜などが栽培され、オアシスの人びとの食料、あるいは現金収入源となつてきた。



サハラ・オアシスの小さな集落、イン・ベルベル。左側に見えるのが灌漑農園 (アルジェリア、アドラール県、2010年)

## 飲食用のバスケットリー

サハラ・オアシスの食事では、料理が入った大きな容器を多勢で取り囲む。そのときに敷かれるのがアラビア語アルジェリア方言でヒシイラとよばれる敷物である。ヒシイラがこぼれ落ちるくずをうけとめ、ぶつ切り肉の骨の置き場となる。食事が終わると、屋外でヒシイラを軽くはたく。食事場の後片付けはいつも簡単に終わる。

カスカスは、北アフリカでよく食べられるクスク

し、サハラ・オアシスの人びとはその香りを、渴きを癒やす香りとしてとらえているようだ。

## 暮らしの変化とともに

オアシスの老人いわく、若いころの楽しみのひとつは罌猫であったという。これに使われたのがシャルカとよばれる罌猫であった。シャルカを作ったのは罌猫を担った男性自身であった。ナツメヤシの葉で編まれた円状の枠に、葉柄基部に生えるトゲをはめ込んでいく。それを野生動物のとおり道にしかけておき、足をはめてしまったガゼルなどをとらえたのだそうだ。罌猫をしかける際、シャルカに結んだ紐の一方の端には木切れをつないでおく。その木切れは地面に打ち込んで固定するためのものではない。罌猫に足をはめてしまった動物は、速く走ることができない。シャルカに結ばれた木切れがつけた跡を追っていけば、労せずには獲物に追いつくことができたそうだ。



# 「汚れなき祈り」に見る 現代ルーマニア社会

新免 光比呂 民博 超域フィールド科学研究部

## 事件の社会背景

社会主義時代のルーマニアでは、他の東欧諸国と同じく無神論にもとづく宗教政策がおこなわれ、何百という修道院が閉鎖に追い込まれたり、宗教的指導者が投獄されたりした。しかし、一九八九年の民主革命以後の宗教の自由化によって状況は一変し、それぞれの地域のコミュニティやビジネスマンによって、地元の誇りや敬虔さの証として教会や修道院が建てられるようになった。その多くが正教会に属するものであった。

筆者のおこなった一九九四年から九五一年にかけての現地調査でも、ルーマニア各地で続々と建造される教会が印象的だった。それは資本主義の混乱のなかで貧困化が進んでいる状況とはそぐわない奇異な現象と思われたが、新しく作られた教会や修道院は、精神的な支えを求めている地元の人々に熱狂的に受け入れられていたようである。そうした傾向は、貧しい地区で特に顕著であったともいわれる。

## 現代の呪術信仰

政治家に対する人びとの深い不信感に対して、軍隊と並んで民衆から大きな信頼を得ているとされる正教会は、家族や魔女もいたと伝えられる。いずれにせよ、魔女、呪いといったものが、ルーマニア社会のなかで当たり前の存在となっていくことがうかがわれる。

## 救済を担う正教会

その一方で、伝統的な制度的宗教の影響も根強く見られる。代表的な存在である正教会はルーマニア社会のなかで精神的な支えとして機能している。革命後の混沌のなかで指針を見失った人びとは、欧米から進出した福音主義派キリスト教に強く惹かれる一方で、ルーマニアの伝統を体現する正教会に救済を見出している。映画のなかでも、家族もおらず経済的に困窮した若者が修道院に逃げ場を見出さず姿が描かれている。他方、正教会は政治的存在としても無視しがたい。中絶や同性愛などに対する正教会の否定的見解が、政治家の動向をも支配している。この映画は、自己を見失い、同性への愛に救いを求める女性、その愛の挫折、そして神をめぐる異なる考え方をもつがゆえの悲劇的な結末をおして、伝統的な宗教と呪術信仰が奇妙に混在している現代ルーマニアを映し出したものだとはいえるだろう。



正教会の特徴であるイコノスタシス  
(写真はいずれも1995年に撮影)

## 「汚れなき祈り」

原題：După dealuri  
2012年/ルーマニア、フランス、ベルギー/ルーマニア語/155分/DVDあり  
監督：クリスティアン・ムンジウ  
出演：コスミナ・ストラタン、クリスティーナ・フルトゥルほか



右：夜明け前、復活祭のミサに向かう人びと  
左上：神への帰依を身を投じて示す信者  
左下：信者の告白に耳を傾ける修道士



この映画は二〇〇五年、ルーマニアの正教会に属する女子修道院で一人の女性が悪魔祓いによって死亡した事件をもとにしている。西欧諸国でも複数メディアによって伝えられたが、色濃く見られたのは現代世界における「野蛮」な行為への驚愕や旧東欧社会への懐疑であった。その根底には、チャウシエスク独裁政権を打倒した一九八九年の民主革命から十数年をへても、ルーマニアがなおバルカンの「未開地域」、「中世社会」であるとの思い込みがある。

映画では、女子修道院で神を求める生活を送る幼なじみの女性にかつての愛を再び求めた女性が、その愛を拒絶されたために、しだいに司祭をはじめ修道女たちへの憎しみを深めてゆく。攻撃的となった女性を恐れた修道女たちは、とうとう悪魔祓いという手段をとるが、その結果、女性は死亡してしまう。

一般の倫理規範をとおして民衆の心に深く根ざしている。こうした民衆の宗教性は、ルーマニアに対する西欧の特殊な眼差しの原因ともなるルーマニアの呪術信仰などにも見出される。

二〇一三年と一四年におこなわれたルーマニアの調査戦略研究所による社会学調査では、ルーマニアにおけるキリスト教信仰と呪術との強い結びつきが指摘された。またブラショフ大学の社会学専攻学生を対象におこなわれた調査でも、同様なキリスト教と呪術信仰のつながり、広い意味での宗教性への学生たちの親和性が見られた。

映画のなかでも、日常生活における呪いの存在がさりげなく台詞に示されている。夫の心を若い女が呪いで盗んだため、妻が反対呪術をかけるという会話である。

こうした呪いの担い手はロマ（ジプシー）の人びととされ、占いと並んで呪いで財をなしたという話も耳にする。以前、話題をさらったのがいわゆる魔女に対する課税問題であった。財政赤字に苦しむ政府が苦肉の策としてとったあらゆる職業への課税強化のなかで、魔女もまた職業として課税の対象となった。それに対して、時の首相バセスクが魔女によって呪いをかけられたという噂もある一方、職業として政府に認められたことを喜ぶ



# あいさつは難しい

いちの しんいちろう  
市野 進一郎

民博 人類基礎理論研究部

最初にマダガスカルに調査に入ったとき、島中央に位置する首都アンタナナリヴの本屋や路上で売られているマダガスカル語の辞書と教科書を買った。教科書で最初に取り上げられていた会話は、出会いのあいさつ「マノウアナ? (こんにちは)」だった。

しかし、マダガスカル南部の調査地に入り、現地の人たちとかかわるようになって、誰も「マノウアナ?」と言っていないことに気がついた。「マノウアナ?」と話しかけて怪訝<sup>けげん</sup>な顔をされることすらあった。これはどういうことなのか、教科書に載っているあいさつのことばを誰も使っていないとは。

その後、すぐに現地の人たちが「サラマ」と話しかけてくることがわかった。辞書を見ると「サラマ」も載っている。なるほど、南部では「マノウアナ?」の代わりに「サラマ」を使うのだな、と理解して、村や森で人に会うたびに「サラマ」とあいさつするようになった。

そのうち、現地での生活に慣れてくると、今度は別のことが気になるようになった。現地の人どうしがあいさつしている場面を見ると、思っていたほど「サラマ」ともあいさつしていないのだ。むしろ、「サラマ」とあいさつしているのは、たまたま道で会ったような、それほど親しくない人どうしのようにすら見える。「サラマ」はよそよそしいあいさつなのか、とわたしは再び悩むことになった。

親しい人たちは出会うと「アコーリ、イレ!」と大声で叫ぶ。これは南部方言のことばで、直訳すると「あんた、どうだい?」くらいの意味

である。「アコーリ、ゲア!」など最後につけることばが変わることもある(なお、「ゲア」はおもに女性に対して使われる)。現地の人たちのあいさつは力強い。よく観察してみると、こうしたあいさつは離れた距離から相手に投げつけるようにされている。お互いに立ち止まらずに、すれ違いながら投げつけるような会話が続けられることもある。

もう少しきちんと会話する場合には、「イヌ、ヴァウヴァウ?」ということばをよく耳にする。「イヌ」は「何か」、「ヴァウヴァウ」は「ニュース」を意味し、直訳すると「何かニュースはないか?」という意味だが、実際は「イヌ、ヴァウヴァウ?」「チミシ(ない)」という慣用的なやり取りが繰り返される。

考えてみると、マダガスカルに限らず、わたしたちも、どういう相手か、相手との距離や会話の状況などであいさつの仕方や言い方を変えている。あいさつは、ことばを習い始めて最初に出てくるが、正確に使うのはじつはとても難しいものではないか。

教科書に載っていた「マノウアナ?」というあいさつをマダガスカル南部の人たちはほぼ使わない。使うのは首都からやってきた人だけで、ずいぶん堅苦しい感じがする。しかし、使える場面もある。親しくなったマダガスカル南部の人に、ことさらにうやうやしい態度で「マノウアナ、トゥンプク?」(「トゥンプク」は相手に対する敬称)としてみる。すると、大抵は冗談として演技のような会話が続いていく。これこそあいさつという気がしないでもない。



# 『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

## 国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

## 月刊みんぱく 2022年5月号

第46巻第5号通巻第536号 2022年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



# 月刊みんぱく

2022年  
5月号

## 編集後記

戦争は人間の生々しい欲望と身勝手を象徴するものである。一方、人にとつて食べることは、生存のみならず文化の多様性に裏付けられた生活の豊かさをあらわしている。このふたつを結び付けた本号の特集は、戦争が異常なまでに人の移動を活性化し、それに伴って食も動いている点に焦点を当てている。中国、インド、ドイツの例から食のあり方はイデオロギーにもなりうるということが理解できた。

一方、地球上のグローバル化もまた人やモノ、文化の移動を活性化している。現代の食生活はグローバル化の産物といってもよい。今まで手に入らなかったような食品が地球の裏側から運ばれてくる。急に特定の食品が市場に大量に出回るようになる。これらの裏には、産地と消費地のあいだのフェアトレード(公正で公平な貿易)の問題があり、ある種の食品を購入する、あるいはほしくないという姿勢が世界の経済にも影響する。

このように食品の選択にはイデオロギーが関係しており、無意識にでもその流れに乗ってしまうことを自覚すると、食べることは自らの身体の問題だけでは済まない。何かに加担することなく「清らかな」食生活を送るためには自分で作り出すしかない。しかし、それもまたひとつのイデオロギーであるというジレンマに陥ってしまう。(三島禎子)

次号の予告 6月号

特集「アイヌ民族と『共生』」(仮)

## 国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

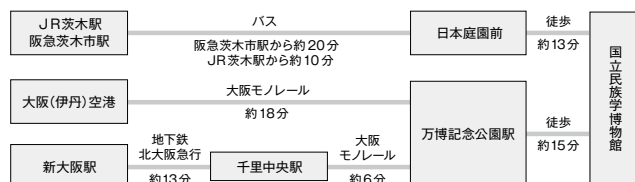
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)  
年末年始(12月28日~1月4日)



### 主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

# 新しいオリジナルグッズのご案内

## トーテムポール T シャツ (全2種)

国立民族学博物館(みんぱく)はまもなく創設50周年を迎えます。それを記念して2020年に立てられた新しいトーテムポールがTシャツになりました。トーテムポールは上からワシ、想像上の双頭の大ウミヘビ「シシウトル」、サケを抱いたクマの姿が刻まれており、人びとを見守る「偉大な力」を象徴しています。

カラー 3,500円(税込)

単色 2,700円(税込)

サイズ:S、M、L、XL



白地にフルカラーのプリント

ベージュ色にブラウン系のプリント



## フィールド・ノート

フィールドワークに欠かすことのできない携帯ノート。  
みんぱくオリジナルのフィールド・ノートが新しくなりました。  
研究者や登山家たちが愛用してきた測量野帳(コクヨ)の表紙に、  
ロゴと絵本作家・岡島礼子さんのイラストを刻印しました。

500円(税込) 中紙サイズ:タテ16cm×ヨコ9.1cm 40枚

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ e-mail: [shop@senri-f.or.jp](mailto:shop@senri-f.or.jp) 水曜日定休  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

